

Title	真銅本系統『住吉物語』についての一考察
Author	金光, 桂子
Citation	人文研究. 56 卷, p.155-170.
Issue Date	2005-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	金児暁嗣教授 : 豊田ひさき教授 : 芝原宏治教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

真銅本系統『住吉物語』についての一考察

金光桂子

『住吉物語』の真銅本系統に属する諸本は、先行研究において、A・B・Cの三類に分類されている。本稿は、新出の伝本である、ノルデンシヨルド・コレクション所蔵の奈良絵本をも考察の対象に加え、同系統諸本の本文の關係について検討したものである。

ノルデンシヨルド本の本文は、全体的にはA類に最も似るが、B類と同じ箇所挿絵を持つ場合、その挿絵の前後ではA類から離れ、B類に近付くという特徴を持つ。こうした本文異同は、挿絵の追加ないし移動に伴って、その前後の本文が整えられたものと推定される。よって、真銅本系統の絵入り本の中では、比較的挿絵の数の少ないA類のような形がより原形に近いもので、ノルデンシヨルド本やB類は、挿絵とともに本文が増補・改訂されて成立したものである。

また、ノルデンシヨルド本の本文には、C類に近似し、かつA類・B類の不備を補うという場合がある。このことは、時にすぐれた本文を有していながら、系統内で孤立していたC類の信用度を高めるものである。C類（北村季吟本）には、流布本系統等の本文に相似する箇所が少なくなく、他系統の本文によって改訂されたものとする見方もある。しかし、その一例である住吉の風景描写の有無については、A類その他の本文では文脈に乱れが生じることになり、C類の本文が本来的なものと考えざるを得ない。C類季吟本は、真銅本系統の原態や性格を探る上で重要な伝本であり、他の諸本と大きく相違する箇所に関しては、慎重に検討してゆくべきであろう。

はじめに

現存する『住吉物語』には様々な異本の存在することが知られており、桑原博史氏による六分類、友久武文氏による十八分類¹⁾など、諸本の整理が試みられている。そのうち、桑原氏のいう第六類、友久氏のいう乙類第十八系統に該当するのが、真銅本に代表される系統である。この系統の諸本は、いわゆる広本系統の中でも最も大幅に増補された本文を有しており、その増幅によって室町物語的変貌を遂げた部分が

見られるなど、注目すべき点が多い。近年、真銅本の影印・翻刻に、同系統の他の主要伝本の翻刻を付した研究書が公刊され、真銅本系統についての研究は、多大な便益を蒙ることになった。

真銅本系統に属する諸本としては、従来八点の伝本が知られていたが、それらの間でもかなり本文異同が大きく、まずはその整理が欠かれない作業となる。本稿では、従来知られていなかった新たな伝本を紹介するとともに、その新出本をも考慮に入れることによって、先行研究で論じられてきた真銅本系統諸本の關係について、検討を加えたいと思う。

一、諸本と先行研究

まずはじめに、これまでに知られていた真銅本系統の諸本を列記しておく。各々の書誌は小林健二氏の論考¹⁾に詳しいので、ここでは省略する。

- ① 真銅本…奈良絵本。二冊。
 - ② 外山本…奈良絵本。三冊。
 - ③ 静嘉堂文庫本…絵巻。三軸。錯簡あり。末尾三分の一ほど欠。
 - ④ 桜井本…写本。一冊。絵巻の転写本。錯簡・脱落あり。
 - ⑤ 野坂本…写本。一冊。
 - ⑥ 北村季吟本…震災で焼失、諸氏の書写したノートが伝わる。末尾に「北村季吟」の署名があったという。
 - ⑦ 野村八良氏旧蔵本…写本。一冊（上冊を欠く）。
 - ⑧ 豊原西方院清超筆巻物切…一葉。絵巻の詞書と推定される。伝称筆者の清超という僧侶は、十五世紀頃の人らしい。
- 本稿では、右の諸本に加えて、スウェーデンにあるノルデンシヨルド・コレクシヨン所蔵の奈良絵本を取り上げたい。ノルデンシヨルド・コレクシヨンは、一八七九年に日本を訪れた探検家ノルデンシヨルド・コレクシヨンの収集になるもので、ストックホルムの国立図書館の所蔵になっていたが、近年、同じくストックホルムの極東博物館 (Östasiatiska Museet) に移管されたという。同コレクシヨンの

千点を超える和古書は、文学・歴史・地理から自然科学の諸分野にわたっているが、古写本の類はさほど多くなく、奈良絵本となると、この真銅本系統に属する『住吉物語』が唯一のようである。

ノルデンシヨルド本の書誌を簡単に記しておく、上中下三冊、四日袋綴。縦三三・九 cm、横二五・八 cm の特大本。上冊のみ打曇表紙が残り、表紙の左上部に「住吉物語上」と記した題簽を貼る。各冊冒頭に「すみよしの物語上（中・下）」と内題がある。上冊四十九丁（墨付四十七丁）、中冊四十九丁（同四十七丁半）、下冊五十一丁（同四十九丁半）。一面十三行書き。

挿絵は濃彩で、挿絵と本文が入り込みになっている、古いタイプの奈良絵本である。一つの場面の挿絵が、見開きはもちろん、数枚にわたることも多い。たとえば、上冊に描かれた野辺の小松引きの場面の挿絵は、二十八丁表の左半分からはじまった画面が、次の見開きを経、さらにもう一枚めくった頁の右半分まで続くといった具合に、まさに絵巻の画面を折って冊子に仕立てたような趣を呈している。よって、挿絵の数を、本文の中に挿絵が出現する箇所の数と、紙面に少しでも絵が描かれている面（半丁を一面とする）の数とに分けて数え、と、上―二十六箇所・四十三面、中―三十一箇所・四十七面、下―三十二箇所・五十九面、計八十九箇所・百四十九面となり、総丁数と比較しても、極めて絵の多い本であることがわかる。他の諸本のうち、①真銅本・②外山本も、室町後期に遡ると推定される古い奈良絵本で、絵の数も多い方だが、それでも前者で四十六箇所・五十八面、後者で

七十六箇所・八十六面であり、やはりノルデンシヨルド本の多さは際立っている。

次に、真銅本系統諸本についての先行研究を瞥見しておく。まず桑原氏は、①真銅本と⑥季吟本とを比較し、双方ともに単純な脱落もあるが、真銅本には独自の加筆や書き換えが見られ、季吟本の方が純粋で正しい形を多く伝えているとされた。また、友久氏は、①真銅本・④桜井本・⑤野坂本の三本を対象に、真銅本に対して桜井本・野坂本がより親密な関係にあること、野坂本は冒頭部分のみ流布本によって本文を改訂していることなどを明らかにされた。

さらに、小林氏は、①～⑥までの諸本について、主な本文異同を分析した結果、A類―①、B類―②～⑤、C類―⑥と三分類された。そして、A類とB類の間には相互に脱落または省略と思われる箇所があり、相補う関係にあること、C類はA類に近い特徴を持つが大幅に異なっている箇所も多く、A類から独自に分かれた本文であることを論じられた。つまり、A類・B類の分類に関しては友久説と合致しているが、C類(季吟本)に古態を認める桑原氏説とは逆の見方をされているようである。

以上のような研究状況を踏まえ、本稿ではまず、小林氏の三分類に基づき、新出のノルデンシヨルド本が、A類・B類・C類のいずれに近いかの確認から始めることにする。

二、A類・B類とノルデンシヨルド本

小林氏は、三十二箇所の異同本文を比較検討した結果、叙上の三分類の結論を導き出しておられる。まずその三十二箇所について、ノルデンシヨルド本の本文を見ると、その大半はA類の本文に一致ないし近似しており、一見ノルデンシヨルド本はA類に属するように思われる。しかし、わずかに四箇所ながら、B類の特徴を備えている部分もあるのは見過ごせない。しかも、そのうち三箇所までは、異同部分の中途あるいは前後に挿絵が存在する。たとえば、次のような例である。

【例一】

A かくて、つなかね月日なれば、ほとんどなく七月七日にもなりぬ
 れは、せうしやう、又かくなん、(254頁)
 B かくて、つなかね月日なれば、ほとんどなく七月七夕にそなりに
 ける。〈挿絵〉さるほとに、少将、七夕にもなりぬれば、かや
 うにいひてそ、し、うかもとへつかはしける。

※「なりにける」：静嘉堂文庫本・桜井本「なりぬれば」

野坂本「なりぬ」

C 七月にもなりぬ。七日あした、たいをすくるとて、少将との、
 おもひつゝけて、かくなん、

N かくて、つな月日なれば、ほとんどなく七月七夕にそなりぬ。

〔挿絵〕七夕にもなりければ、せうしやう、又かくなん、

主人公の姫君に思いを寄せていた少将が、継母の企みで妹の三の君と結婚させられてしまった後、姫君に歌を贈っては思いを訴える場面が月次に展開される、その一齣である。A類が単に七月七日になったことを告げて文章を続けていくのに対し、挿絵を挟むB類では、挿絵の前後に「七夕になり」という記述が繰り返されている。特に外山本・野坂本では、挿絵の直前でいったん文を終止させ、挿絵の後、改めて「さるほとに」と語り起こす形になっている。ノルデンシヨルド本の本文もまた、「七夕にそなりぬ」と文を閉じ、挿絵を挟んで「七夕にもなりければ」と続いており、措辞に多少の相違はあるものの、A類よりはB類に近いといえよう。もう一例挙げる。

【例二】

- A …と有けるを、とりて、せうしやうの御文候とて、きたのかたにまいらすれば、…(243頁)
- B …とありけるを、もちて、きたの御かたへまいりけり。〔挿絵〕ちくせん、少将との、御とて、きたのかたへまいらすれば、…
- C …とありけるを、とりて、少将とのへ御文とて、きたの方にまいらすれば、…
- N …とかきて、ちくせんにやり給ひけり。ちくせん、文たまはりて、きたの御かたへそまいりけり。〔挿絵〕せうしやうとの、文候とて、きたの御かたにまいらすれば、…

少将が姫君宛に書いた文を、仲介役の女房筑前が継母北の方と共謀して、三の君のもとへもたらす場面である。ここでも、A類が一続きの文になっているのに対し、B類では、「きたの御かたへまいりけり」という一節が入って文を閉じ、挿絵に続くが、挿絵の後にも「きたのかたへ」という言葉があるので、やや重複の感を与える。そしてノルデンシヨルド本もまた、「きたの御かたへそまいりけり」の一節があり、続いて挿絵が入る点でB類と一致している。

【例三】

- A …とかき給へは、ちくせん給て、かしこにまいりてしうとのへまいらすれば、…(241頁)
- B …とかきて、ちくせんにたふ。〔挿絵〕ちくせん、ふみたまはりて、かしこにまいりてしうにまいらすれば、…
- C …とかきて給へるを、筑前とりて、かしこへゆきて侍従にとらすれば、…
- N …とかきて、ちくせんにたまわりける。〔挿絵〕ちくせん、文をもちてかしこにまいり、しう殿にまいらすれば、…
- 【例二】とよく似た場面になるが、筑前が少将の二回目の文を主人公の姫君に取り次ぐ場面である。この箇所でもB類は挿絵を含み、その挿絵の直前に「ちくせんにたふ」という語句が入って、文を終止させている。そしてノルデンシヨルド本も、それに非常に近い形をとっているのである。

ちなみに、A類、B類の絵入り本、及びノルデンシヨルド本について、挿絵の挿入位置を比較してみると、三種のうち二種以上で挿絵位置が一致する箇所数は次のようになり、B類とノルデンシヨルド本との一致率が際立って高いことがわかる。

- A・Bのみ一致…五箇所
- A・Nのみ一致…五箇所
- B・Nのみ一致…三十五箇所
- A・B・N一致…五箇所

そして、B類とノルデンシヨルド本のみ同じ箇所に挿絵を有する場合、【例一】～【例三】のように、挿絵の前後の本文もまた、A類から離れて、両者が共通した特徴を持つという事例が見られるのである。それでは、B類とノルデンシヨルド本の挿絵が一致しない箇所の本文はどうなっているのだろうか。次のような例がある。

【例四】

- A …とありければ、いはきならねは、いとをしとおほせとも、世のつゝましさにすくし給ふ。(251頁)
- B …とありけるを、ひめきみに、御返事めされ候へときこえけり。〈挿絵〉ひめ君、いは木ならねは、いとおしとおほせとも、世のつゝましさにすくし給ふ。
- C …とありけるを、さすかにいとほしとおほせとも、万つゝましさに過行。
- N …とありければ、さすかいわきならねは、いとをしとやおも

ひつゝ、世のつゝましさにすくし給ふ。

少将からたびたび贈られてくる文に対する姫君の反応を描いた一場面である。ここでは、B類のみに挿絵が入り、その直前に、傍線部のように、他本にはない乳母子侍従の行動を述べる一節が入り、文を閉じている。一方、挿絵を持たないノルデンシヨルド本の本文は、同じく挿絵のないA類に近いものである。同様の事例は他にもいくつか見られ、ノルデンシヨルド本の本文は、B類と挿絵を共有する箇所の前後ではB類に、そうでない場合はA類に近付くという傾向が看取される。

逆に、ノルデンシヨルド本のみ挿絵が存在する場合の事例も挙げておこう。

【例五】

- A 中納言、かへり給て、おそろしきしたの心をもしり給はて、きたのかたにのたまひあはせけるやう、けふのうちまいりに、…(261頁)
- B 中納言、かへり給ひて、おそろしきしたの心をもしり給はて、北方にの給ひけるやうは、けふのうちまいりに、…
- C かへりて、おそろしきとありけるとも知りたはて、北の方にのたまふやう、うちまいりは…
- N 中なこん、かへり給ひて、おそろしきこゝろのうちをもしり給はて、きたのかたにかくとの給ひけり。〈挿絵〉中なこん殿、きたのかたにの給ふやうは、けふうちまいりのおりふし、…

姫君の入内が中止になった後、宮中で兵衛督との縁談を整えてきた父中納言が、帰宅して北の方に報告するという場面である。ここでは、挿絵を含まないA類・B類がほぼ同文であるのに対し、ノルデンシヨルド本のみ、挿絵の前後で「きたのかたに」「の給ふ」が繰り返されている。こうした事例もやはり、他にいくつか見出すことができる。

以上、B類とノルデンシヨルド本がともに挿絵を有する箇所、B類が単独で挿絵を有する箇所、ノルデンシヨルド本が単独で挿絵を有する箇所について、いずれもその挿絵の前後に本文異同が見られる事例を挙げてきた。こうした事例は、挿絵の有無と本文異同との間に何らかの連関性があることを窺わせる。とすると、挿絵が省略されるに伴ってその前後の文章も削られたか、あるいは逆に、挿絵が増補されるに伴って前後に文章が加えられたか、いずれかということになる。

これらの本文異同のほとんどは、挿絵のない本文では一続きの文であったところが、挿絵のある場合は挿絵の前で文がいったん終止し、挿絵の後で新たに文が起こされるという形のものであった。その際、【例一】【例二】【例五】のように、挿絵の前後で表現に重複を来している場合もあった。もちろん、この程度の重複をもって、ただちに欠陥本文であるとか補筆だとか断定することはできない。もともと重複していた文章を、後に繰り返しを避けてすっきり整えたというケースも、当然あり得よう。しかし、これらの事例のように、挿絵が関わる場合、挿絵を挟んだ前後の文章の短縮化、しかも、もともとそこで切れていた文を、わざわざ次の文とつながるように改変するというこ

とは、その逆のケースよりも考えにくいのではなからうか。

次のような例もある。継母にたばかられていたことに気付いた少将が、雪の日に侍従を介して姫君に歌を贈る場面である。やや長文になるので、挿絵を持たないC類は省略し、B類・ノルデンシヨルド本は、問題になる相違点のみ記す。

【例六】

A …ひきむすひたるふみをそたひける。よろつ人めのつゝましさにとて、とかくのことほなかりける。※あやし、いかなる御文なるらんとて、ひらき、ひめ君にかくと申ければ、見くるしき事かなとて、そはめに見やり給へは、

(和歌二首・省略)

とありければ、人々、はや、この君はしり給ひぬるよとて、わらひあへり。〈挿絵〉かくて、としもあらたまり、…(246頁)

B 「給へは」↓「給ひぬ」〈挿絵〉

N ※に「〈挿絵〉し、う、せうしやう殿の御ふみをと」が入る。

この場面は、A類・B類・ノルデンシヨルド本とも挿絵を持つのだが、それぞれ少しずつ位置が異なっている。A類・B類・ノルデンシヨルド本のすべてについて一般的にいえることとして、挿絵の入る位置は一つの場面の本文が終わったところであることが多い。そこから推すと、この場面の挿絵としては、次の場面に移る直前にあたる、A類の位置が本来的なもので、B類やノルデンシヨルド本の方が少しずつ

ずれているように思われる。そして、各々の挿絵前後の本文を見ると、B類は挿絵直前で「給ひぬ」と文を閉じているし、ノルデンシヨルド本は、少将が侍従に「ひきむすびたるふみ」を渡したという記述がすでにあるにもかかわらず、挿絵の直後に「し、う、せうしやう殿の御ふみをとり」という一節を置き、状況を改めて説明してから次に続いていく。こうした本文異同は、挿絵位置の移動に連動するもの、つまり、挿絵が新たな箇所に入ってきたため、その前後の本文にも手が加えられたものではないだろうか。

また、今まで挙げてきたような比較的大きな異同以外にも、B類やノルデンシヨルド本では、挿絵直後の文章の起筆に、接続詞ないしそれに類する言葉を置く傾向がある。事例は多数に上るが、姫君の乳母（侍従の母）が亡くなった場面から、一例を挙げる。

【例七】

- A ……つるにはかなくなりけり。ひめ君、し、う、かた／＼の御なけき、さこそありけめ。(352頁)
- B ……つるにはかなくなりけり。〈挿絵〉さるほとに、ひめ君、し、う、かた／＼の御なけき、さこそありけめ。
- C ……はかなくなりぬ。姫君、侍従か思ひ、さこそありけめ。
- N ……つるにはかなくなりけり。〈挿絵〉その、ちは、ひめきみ、し、うかかた／＼のなけき、さこそありけめ

この例では、いずれの本文でも「はかなくなりけり（ぬ）」で文は閉じているのだが、挿絵がある場合のみ、その次の起筆部に「さる

ほとに」「その、ちは」といった、場面転換や時の経過を表す言葉が置かれている。これはやはり、挿絵で一度本文が中断した後、新たな場面を語り起こそうとする意識の現れではなからうか。なお、この箇所に関しては、A類でも一文前の位置に同じ場面の挿絵（姫君・侍従らが乳母の死を悲しむ図）があり、先の【例六】同様、挿絵が移動した例と考えられる。

小林氏は、A類とB類の間で文章の出入りがある事例について、主に一方の脱落・省略として処理しておられた。それは首肯される場合も多いのだが、逆に、他方による加筆という考え方もあり得よう。特にB類とノルデンシヨルド本において、挿絵の前後で他本よりも文章量が多い場合、挿絵の追加あるいは移動に伴う増補である可能性が高いように思われる。

念のため、挿絵が追加されたと思われる【例一】と【例五】の事例について、どのような場面の挿絵であるか、図柄を確認しておくこと、次のようになる（【例一】と【例三】については、B類とノルデンシヨルド本の図柄はほぼ同様である）。

- 【例一】侍従、亡母の法要のため姫君から贈られた衣を見て泣く
- 【例二】少将、筑前に文を託す
- 【例三】少将、筑前に文を託す
- 【例四】侍従、姫君に少将の文を差し出す
- 【例五】中納言、宮中で兵衛督と語らう
- 『住吉物語』は、真銅本系統に限らず、鎌倉期の古絵巻をはじめ、

絵本・絵巻の類が数多く作られているが、それらにおいて共通してよく描かれる場面というのは、ある程度固定化している。しかし、右に挙げた【例一】～【例五】のような図は、他系統の絵入り本にもあまり見られないようで、B類やノルデンシヨルド本独自のものである可能性が高い。【例二】～【例三】の、少将が筑前に文を渡す図は、姫君にはじめて文を贈ろうとする場面ではよく見られるが、このように二度目以降まで繰り返し描かれることは珍しい。繰り返しということでは、【例四】のような図も、少将が侍従を介して姫君に思いを訴えるたびに、B類やノルデンシヨルド本では、何度も同じような構図で描かれている。ワンパターン化をも厭わず、挿絵を多く入れることがB類やノルデンシヨルド本の方針だったようで、そのため他本ではあまり絵画化しないような場面にも絵を入れることになったのではなかろうか。

以上の検討から、真銅本系統内部における本文の変容の一つの要因として、挿絵の追加あるいは移動ということを想定しておきたい。挿絵の前後における本文のゆれということでは、本文を記すスペースが足りなくなったために、挿絵直前の文章を端折ったかと思しき事例には、しばしば遭遇するところである。B類諸本やノルデンシヨルド本にも、そういった単純な省略は少なからず見受けられる。しかし、本稿で見てきたような増補の場合は、挿絵と本文とをただ漫然と並置するだけではなく、挿絵の前で文章に区切りをつけ、多少の重複は来してでも、挿絵によって一度途切れた物語を新たに語り起こそうとい

う意図による、自覚的な補筆であるといえよう。¹³

さらにいえば、真銅本系統の伝本には絵入り本（ないしその転写本）が多く、しかも大量の挿絵を含んだ、制作時期も室町期に遡るかという奈良絵本が複数存在するのだが、より古い形は、比較的挿絵の少ない、A類に近いものだったのではなかろうか。A類が独自に挿絵を有する箇所では、特徴的な本文異同は見出せないということも、A類があまり手を加えられていないものであるという推測に矛盾しない。もちろん、A類が全般的にB類より古態を残しているというわけではなく、小林氏のいわれるとおり、B類の方がすぐれた本文を保っている部分は少なからず見出せるし、挿絵の有無や位置に関しても、A類の形が本来的なものだとは考えがたい場合もある。しかし少なくとも、比較的挿絵の少ないものから多いものへという方向性は、認められるのではなかろうか。

挿絵の多いB類とノルデンシヨルド本は、先にも述べたように、全く同じ位置、またはごく近い位置に、図柄もよく似た挿絵を有する場合が非常に多い。一方で、それぞれ独自の挿絵や本文も有しているし、各々が別個にA類と共通した特徴を持つこともある。そうしたことから、B類とノルデンシヨルド本との関係を考えると、ある程度挿絵が増え、本文も改変された共通祖本のようなものがあり、そこからそれぞれが独自に、さらに増補・改訂を重ねた結果、現在のような形に至ったのではないかと思われる。もっとも、挿絵の追加とその前後の本文の増補とが、必ずしも同時に起こったとは限らず、まず挿絵のみ加わ

り、転写の段階で挿絵前後の本文が整えられたという事情も考えられるだろう。

ノルデンシヨルド本は、単純に本文を比較した限りでは、A類とB類の中間的な立場にあると見られるが、そうした三者の関係について、挿絵の増補に伴う本文異同という観点から考えてみた。

三、C類とノルデンシヨルド本

ノルデンシヨルド本は、前章で述べたような挿絵前後の本文以外にも、A類・B類から離れた本文を持つことが少なくない。その中には、不注意によると思われる大幅な脱文や衍文も多いが、時にノルデンシヨルド本がA類・B類の不備を補う場合もある。たとえば、たばかられていたことを知って詰問する少将に対し、筑前が釈明する言葉の中に、A類・B類には、ほぼ同文で次のような文章がある。

たひく御文宮ひめの御方へまいらせ給へとも、なひき給ふ御けしきも候はず。御心つくしも、御いたはしく候しところに、中納言のおほせあるほとに、いかてかさやうの御ふるまひ候へき。た、御心つよきにても候はぬなり。おもひたへ給へとの給ふ。(245頁)

最後の「の給ふ」の主語は北の方のはずなので、途中から北の方の言葉が引用されていることになるが、その引用がどこからはじまっているのか、この文章ではわかりにくい。しかし、ノルデンシヨルド本では、傍線部が、

中なこん殿のきたの御かた、この御ことをほのかにき、たまひてみやひめ、さやうになひきたまはぬもことわりそ。御うちまいりと、中なこんのおほせあるほとに

となっており、通じやすい。A類やB類は、こうした文章から、「中納言」の目移りによって脱文を生じたものと思われる。

このように、ノルデンシヨルド本がA類・B類よりすぐれた本文を保っている事例において、C類が同じような形をとる場合があることも注目される。次に挙げる例は、少将の文を託された筑前が、久々に姫君のもとを訪れて述べる挨拶の一部分である。

【例八】

A こみやの御事、いかはかり御こひしくおほしいつらん、いへと申候へとも、人々をも見まいらせんとてまいりさふらふなり
(240頁)

B こみやの御こと、いかはかりかは、よくおほしいつらん。人々をも見まいらせ候はんとてまいりさふらふなり

C こ母宮の事、いかに御こひしくおほしいつらんと申せとも、としよりては、すきにしかたのゆかしくて、人をも見参らせんとて参りさふらうなり

N こみやの御事、いかはかりこいしくおほしいつらん。いつと候へとも、としよりては、すきにしかたのみゆかしくて、人々をも見まいらせんとてまいりさふらうなり

A類の「いへと申候へとも」が解しにくいのが、ノルデンシヨルド本

によると、「いつでもそうとはいえ、特に年をとりますとなおさら、昔のことばかりが恋しく思われて」という意であることがわかる。¹⁵ A類本文は、ノルデンシヨルド本の波線部を落としてしまったものと考えられる。B類は、傍線部・波線部ともに落としているのであろう。

しかしC類には波線部があり、傍線部は少し乱れているが、「いつらん」と「いつと申せとも」の目移りを想定すれば、ノルデンシヨルド本のような形に復原できよう。

また、次の例は、姫君の失踪が判明して大騒ぎする中納言邸の様子を描いた部分である。

【例九】

A されは、まことにこそとて、せんかたなければ、中納言よのなけき給ふにおとらしとおもひて、なみたもおちねともなくよしにて、かほうちあかめてそゝ給ひつる。(275頁)

B されはこそ、まことにこそとて、せんかたなければ、中納言にまいり、此よし、かくと申ければ、なけき給ふことかきりなし。北方も、なみたもおちねともなくよしにて、かほうちあかめてゐる給ひけり。

C されは、まことにと、おもひやりたるかたもなし。こゑをたて、泣きあへり。此の由、中納言にしかしかと申せは、おほしきもてなし、うちあきたるさまにて、侍従か里なんにおはしたるやらん、たつねよといひて、中納言のなき給ふにおとら

しと、涙もたえねともなくよしにて、かほうちあかめていたり。

N されは、まことにこそとて、中なこんにかくとそ申させ給ひける。やかてたひにおはして見給へは、うせ給ひぬる事うたかひなし。きたのかたもおなくおはして、あなあさましやとて、
 さわきたるよしにてそありける。しほうかさとなとへかおはしたるらん、たつねよとてそありける。中なこんのなけき給ふにおとらしとおもひて、なみたをちねともなくよしにて、かうちあかめてそゝ給へり。

A類の本文によれば、文脈上、「されは、まことにこそ」と姫君の失踪を確信したのは三の君であり、泣くふりをして「かほうちあかめて」いたのは北の方であるはずなので、文の途中で主体が転換することになり、このままでは不自然である。これもノルデンシヨルド本を参照すると自然な展開になっており、A類は、やはり「中納言」の目移りによってか、波線部を落としてしまったものと推測される。B類は、現状の本文でも一応意味は通じるが、やはりノルデンシヨルド本本文で網掛けを施した部分の脱落ないし省略ではないかと思われる。そしてC類の本文に目を転じると、若干措辞を異にするものの、文章の流れはノルデンシヨルド本にほぼ等しい。

真銅本系統内において、C類(季吟本)が他本よりもすぐれた本文を持つ場合があることは、先学によってすでに指摘されている。しかし、季吟本の本文は、時に他本と対校不能なほどかけ離れており、類本もまったく知られず、真銅本系統の中で孤立していた。しかも、季

吟本そのものが現存しないので、近代以降に転写を重ねたものに頼らざるを得ず、文意の通らないところも多いなど、何かと取り扱いの難しい本で、他よりすぐれた本文を持つ場合でも、それを本来の形と比べてよいかどうか、ためらわせるところがあつたように思う。しかし、

【例八】 【例九】のように、全体的によりA類やB類に近いノルデンシヨルド本が、季吟本とほぼ同じ形で、他本の不備を補うという現象が見られることは、季吟本本文の信用度を高めるものではなからうか。

はじめに記しておいたように、季吟本の本文については、真銅本系統の原形を伝えるものとする桑原氏と、A類から分かれた後出の本文とする小林氏との間で、見解の相違が見られる。特に問題となるのは、季吟本が系統内の他本から離れ、流布本系統をはじめとする、他系統の本文に近付く場合である。『住吉物語』の諸本全体の中で、真銅本系統が比較の後出の系統であることは明らかなので、桑原氏の立場では、季吟本が他系統の本文に近いことは、古説の有効な根拠になる。一方、小林氏は、季吟本が他系統の本文に相似する箇所については、季吟本が流布本等を参照して独自に改訂したものと考えておられるのである。

実は、【例八】 【例九】の箇所でも、季吟本の本文は流布本に近似している。それぞれ流布本の本文は、次のようなものである（以下、流布本系統の代表として藤井本¹⁶を用いる）。

【例八】

いつといひなから、年よりては、すきこしかた、御こひしさの、

かたくなはしさに、人人をも、見たてまつらむとて、：

【例九】

中納言に、しかくときこゆれば、あきれさはきて、こゑをさ、
けて、なきかなしみ給ふ事、たとへむかたなし。：（中略）：
まゝ母、あきれたるさまして、侍従かさとか、たつねたてまつれとて、中納言との、かたはらに、なくよしにて、にかみゑたり。

文章の構造自体が異なっているため、比較できる部分は限られているが、それぞれの波線部は、季吟本に対応する本文があり、A類・B類にはない。しかし、これらの場合、真銅本系統諸本において季吟本が孤立しているわけではなく、ノルデンシヨルド本が季吟本と同様、流布本等の本文に近い形をとっているのであつた。少なくともこのような例においては、季吟本の本文が他系統に近いといっても、独自の改訂とはなしがたいであろう。

季吟本が真銅本系統の純粹な形を多く伝えるものであるか否かは、真銅本系統の成立や性格を考える上で、大きな問題となってくる。章を改めて、もう一例、季吟本の改訂と見られている箇所について検討してみたい。

四、住吉の風景描写

継母の策謀から逃れるため、都を抜け出した姫君と侍従は、知己の尼君を頼って住吉に到着する。その際、流布本等、他系統の諸本では、かなり長文にわたって住吉の風景が描写されているのだが、真銅本系統では、A類・B類、さらにノルデンシヨルド本にもそれがなく、季吟本のみが有している。小林氏は、この箇所を、季吟本が独自に他本によって加筆した例として挙げておられる。しかし、その前後のA類その他の本文を子細に見ると、いくつか不審な点が浮かんでくる。やや長くなるが、A類の本文を引用する。

夜のうちに、とはより御ふねにそめされける。よとのわたりをすきつゝ、あとをかへりみれば、みやこはいととをさかりければ、涙をおさへて、かくなんそゑいしましゝける。

けふよりはよそにみやこのふるさとをいとへたつるきりの

あけほの

しゝう、かくなん、

うきさとにあとはとめしかねのねのけふよりかはるうらの

なみかな

とうちなかめ、ゆふ日をなかむれば、うみの中に入かとそあやまたれける。おほろけにも、人のをとつればんへるへきたよりもなきすみかにて、心すみぬへきところなれば、かくなん、

すみよしとなになかるゝもことわりや世のうき時はすみよかりけり

ころかな

しゝう、かくなん、

もしほやくけふりもきりももろともにあこかれいつるわかころかな

松たけのかはらぬいろのめてたさをいつれひさしと君のみそ

見ん

さて、あま君のもとにをはしたれば、たいめん申、…¹⁷ (272~273頁)

まず、この場面における時間の経過を見てみると、夜の内に姫君と侍従は鳥羽で乗船、川を下って淀のあたりに来た時、都の方角を顧みて歌を詠む。その姫君の歌に「あけほの」とあることから、夜も明けつつあることがわかる。ところが、それに和した侍従の歌の直後に、「ゆふ日」という語が現れ、突然夕方の情景になる。「とうちなかめ」と「ゆふ日をなかむれば」との間には時間的な隔たりがあるはずだが、本文では示されていない。しかも、その次の文には「…すみかにて、心すみぬへきところなれば」とあり、住吉の住居に着いた姫君たちの感想と思われるが、本文をたどる限り、その到着を明示する表現はなく、旅中の場面から直接続いているようにしか見えない。

さらに、和歌を「首挟んだ次の文には、「ふゆふかくなるまゝに」とあり、季節が推移しつつあることがわかる。姫君が都を出たのは、初冬、「神な月廿日あまり」で、これより少し後の場面には、霜月になったという記述がある。従って、ここではまだ十月のはずで、「ふゆふかくなる」というには少々そぐわない。しかもその後、和歌三首を挟んで続くのは、「さて、あま君のもとにをはしたれば」にはじまる、姫君が住吉の尼君とはじめて対面する場面である。この対面は、姫君が住吉に着いた当初になされたはずで、「ふゆふかくなるまゝに」という、何日も経ったかのような表現の後に位置するのは不自然である。

実は、「ふゆふかくなるまゝに」に類似する一節は、他系統の諸本にも見出すことができる。ただしそれが現れるのは、もう少し後の方、姫君の住吉到着の場面が一段落した後のことである。流布本から引用する。

さて、住よしには、やうく、冬こもれるまゝに、いと、さひし
 さまさりて、あらし風ふけは、わか身のうへに、浪立かゝるこ、
 ちしてける。沖より漕ぐる舟には、あやしきこゑにて、にくさひ
 かけるなど、うたふも、さすかに、おかしかりけり。すみの江に
 は、霜枯の芦、水にむすほ、れたる中に、水鳥の一つかひ、うは
 けの霜、うちはらふにつけても、おもひのこす事なかりけり。

A類の網掛け部分は、こうした別の場面の一部に歌が付け加わったもので、何らかの理由でここに竄入したのであろう。

しかし、それに続く侍従の歌はどうだろうか。侍従の「もしほやく」歌は、第四句「あこかれいつる」が、姫君の「みやこをば」歌の「うかれいてつゝ」に対応する点で、一応唱和の形をなしてはいる。しかし、姫君の歌が、「わかみのうへに、しらなみのかゝる心ちして」という地の文を受けて、「たちくるなみにしつむころかな」と詠んでいるのに対し、侍従の歌の「もしほやくけふり」は、直前の本文に現れない景物であり、やや浮き上がった感も否めない。

それでは、この場面の季吟本の本文は、どのようになっているだろうか。舟中での侍従の詠歌以降を引用する。

うき事をあととはと、めしかねの昔今日うちかはる浦のなみかな
 な

すみよしにゆきつきたれば、住の江とて、いとおかしき所に、かや屋のいたひさしなるか、いとおかしきさまにすみあらしたる、江につくりかけたれば、すのこの下に、魚などのあそふもみえつ、いとおかしきさまなり。南には、一村の木ほのほのとみえて、あまのとまやにみるめかりほし、あしふける屋にけふりたちのほりうすゝみにかける芦のこゝちして、ひかしには、ま垣に葛、朝かほなと咲きかゝりて、きしには、いろくの花植ゑならへて、浦々ほるはる見えわたりて、波のよるもいとおかし。松の木の間より、帆かけたる舟の、あはち鳥をゆきかよふさまを見えつ、涙たよふもかり船、はかなく見えつ、月のけしき、海に入とそ見えける。静にあはれなるすみかななり。

すみよしと名になるゝたにことわりや世のうき時はすみよかりけり

又、侍従、かくなん、

もしほやくけふりもきりも露ともにあくかれ出つるわか心かな

あま君、对めんして、：

まず、「すみよしにゆきつきたれば」と住吉到着を明示しており、続いて、長文の風景描写がはじまる。この描写は、他系統に見られるものと同様の文章である。²⁰そしてその最後の方に、「月のけしき、海に入とそ見える」とあり、「月」は「日」の誤りかもしれないが、いずれにせよ、住吉に到着した後の風景描写の一部ということであるから、時間的な齟齬は特に感じさせない。

もう一つ、A類と大きく相違しているのは、先ほど述べた網掛け部、「ふゆふかくなるまゝに」の情景と姫君の「みやこをは」歌を持たないことである。その結果、侍従の「もしほやく」歌は、姫君の「すみよしと」歌に応じたものになっている。そしてこの場合、直前の風景描写の中に、「あしふける屋にけふりたちのほり」という一節があり、歌の「けふり」はこれを踏まえていると見ることが出来る。住吉のすまいを見渡して、この地も「世のうき時は」住みよいと、己に言い聞かせるように感慨を漏らした姫君詠に対し、囑目の景を用いて、それでもやはり都へと向かう心境を詠じたことになり、唱和として十分に成り立っていよう。なお、A類その他の本文にあった、侍従のもう一

首「松たけの」歌も、季吟本には見えない。この歌は、この場の状況にふさわしくない祝賀歌でもあり、A類等の増補かとされている。²¹

以上見てきたように、この場面は、季吟本で読む方が——季吟本特有の細かな文意不明部分を措けば——、自然な解釈が可能である。A類その他の本文のように、長文の風景描写を持たない場合、時間の経過等、文脈にかなりの乱れが生じることになるのである。しかも、「もしほやく」歌は、他系統の諸本には見出せない、真銅本系統が独自に追加したと思われる歌である。この歌が詠まれる背景として、住吉の風景描写が不可欠であったとすれば、真銅本系統の原形には、この描写が存在したと考えざるを得ないのでなからうか。ここでも、季吟本が他系統の本文によって増補・改訂したという考え方には、疑問を抱かされるのである。

季吟本の本文が系統内の他本から大きく離れ、他系統に接近している例は他にも数多く、その中には、単なる本文異同にとどまらず、『住吉物語』の一異本としての真銅本系統の性格にまで関わってくるものもある。たとえば、真銅本系統の特色として、霊験や夢告げの肥大化、特に中世的な信仰の反映ということがいわれ、その一例として、六角堂の法師との間に浮き名を立てられた姫君が、濡れ衣を晴らすため、北野天神に祈誓する場面が指摘されている。²²しかしこの記事は、真銅本系統の中でも季吟本には見えず、その他の諸本のみが有するものであり、季吟本の省略なのか、他本が付加したものなのか、といった問題が生じてこよう。季吟本の取り扱いには困難であるけれども、真

銅本系統の原態や性質を考える際、一つの鍵となる伝本であることは間違いない、こうした個々の問題について、慎重に考えてゆかねばならないだろう。

おわりに

以上、新出のノルデンシヨルド本を加えて、真銅本系統『住吉物語』の諸本について考察した。絵入り本の場合、挿絵の増補に伴って本文に手が加えられたケースを指摘し、挿絵の少ないものから多いものへという方向性を推測した。また、季吟本については、ノルデンシヨルド本との関係、文脈の通じやすさなどから、他系統に近い本文を持つ場合でも、真銅本系統の原形を保っている可能性があることを述べた。中世に様々な異本を出現させた『住吉物語』の中でも、真銅本系統は、本文量が最も多いというだけでなく、内容的にも際立った特色を持つ点、系統内部でも、転写に伴う異同のレベルにとどまらず、性格に関わるほどの相違が見られる点、多く上製の絵入り本で伝わっている点など、物語の享受と変容の諸形態にまつわる様々な問題を提起している。こうした異本がどのように形成され、どのように展開してきたのかを探る上で、本稿が一助となればと思う。

〔注〕

- 1 桑原博史『中世物語研究——住吉物語論考——』（一九六七年、二玄社）。以下、桑原氏の所説は同書による。
- 2 友久武文『住吉物語の諸伝本について』（『伝承文学研究』第二十号、一九七七年六月）。
- 3 小林健二・徳田和夫・菊地仁『真銅本「住吉物語」の研究』（一九九六年、笠間書院）。
- 4 小林健二「真銅本「住吉物語」解題——同系諸本と真銅本の位置——」（前掲注3）。
- 5 この奈良絵本の存在については、反町茂雄『日本の古典籍』（一九八四年、八木書店）などに簡単な紹介がある。
- 6 友久武文編『広本住吉物語集』（一九六七年、広島中世文芸研究会）解説。前掲注4。以下、小林氏の所説は同論文による。
- 7 以下、各類の本文を例示する場合、Aは真銅本、Cは季吟本であり、Bは外山本をB類の代表として掲げ、他本に異なる場合は必要に応じて注記する。Nはノルデンシヨルド本である。真銅本・季吟本・外山本のうち、挿絵が問題になるのは外山本・静嘉堂文庫本及び桜井本（親本にあった絵の位置を一行空白で示している）の三本であるが、挙例箇所に関しては、それぞれの挿絵挿入位置は完全に一致している。
- 9 B類は外山本を基準とする。
- 10 B類の絵入り本のうち、外山本の挿絵は未見のため、専ら静嘉堂文庫本のマイクロフィルム版により確認した。小林氏の解説によると、静嘉堂文庫本と外山本とは、「挿絵の絵柄にも近似性が認められる」とのことである。
- 11 【例二】の場面については、その直前・直後の、筑前が北の方に懐柔され引き出物をもらう場面や、北の方が三の君に少将への返事を書かせる場面が描かれることは多い（B類・ノルデンシヨルド本にもあり）。
- 12 また、次のような例は、A類の本文では意味が通らないこと、C類もB類やノルデンシヨルド本と同じく傍線部を持つことから、A類における脱落と見ておきたい。
A し、う、さてはうれしきせんちしき。月にもなりぬ。九日のあした、
…（256〜257頁）
B し、う、さてはうれしくおほせ候せんちしきかなといひたまひけり。
〔挿絵〕さて、きく月にもなりぬ。九日のあした、…

- C 侍従、ゆゝしき善知識にあひ候へしとたはふれけり。かくて、長月にもなりぬ。九日のあしたは、……
- N しゅう、さてはうれしきせんちしきにあひまいらせ候とたわふれけり。〔挿絵〕かくて、九月にもなりぬ。九日のあした、……
- 13 ただし、B類やノルデンシヨルド本において、すべての挿絵の前後でこのような処理がなされているわけではなく、一続きの文の中途に挿絵を挿入したままの形で放置されている箇所もある。また、このようなタイプの本文異同は、物語の前半に多く見られ、後の方になるに従って少なくなるようである。
- 14 静嘉堂文庫本とノルデンシヨルド本の挿絵は、画中に人物名を注記すること、ごく単純な異時同図法を用いること、本文には直接登場しない従者たちの姿を頻繁に描くことなど、画風にも似通った点がある。また、ノルデンシヨルド本で二箇所に分けて描かれている場面が、静嘉堂文庫本では一図にまとまっているという事例も数例あり、密接な関係を窺わせる。
- 15 ただし、ノルデンシヨルド本でも、正しくは「いつと申候へとも」とあるべきか。
- 16 引用は横山重校訂『住吉物語集（本文篇）』（一九四三年、大岡山書店）による。ただし表記を改めたところがある。
- 17 引用箇所において、B類に大きな本文異同はない。ノルデンシヨルド本は、「すみよしと……」の和歌から「しらなみのかゝる心ちして」までを欠くが、これは単純な脱落と考えておく。
- 18 広本系統の諸本では、この場面に歌を持つものもあるが、「水鳥」などをモチーフにしたまったく別の歌で、「みやこをは」歌は真銅本系統（季吟本を除く）独自のものである。
- 19 ただし、ただあてもなくさまようという意の「浮かる」に対し、「憧る」はある対象に惹かれてさまようという意を持つから、侍従詠の「あこかれいつる」は、今いる住吉から恋しい都へ向けて心が遊離することをいっている。その点、都から「うかれいて」たことを詠む姫君詠と、さほど密着しているわけではない。
- 20 参考までに、流布本の本文を掲げる。
すみよしにゆきたれば、すみの江とて、ところく住あらしたるに、
うみさしいりたるに、つくりかけたれば、すのこのしたに、うをなと、
あそふもみえて、南は一むらの里、ほのかに見えて、とまやともに、
みるめかりほし、あしの屋に、こゝろほそく、けふり立のほるけしき、

うすすみにかける、あしたあしたにいたり。ひかしには、まかきにつたふ、
権など、かゝりて、きしには、色々の花もみち、うへならへたり。に
しには、うみはるくと、見えわたりに、浪たてる松の木のまより、
ほかけたる船とも、あはち嶋を、ゆきかふさまも、浪にたよふ、かゝ
り舟、はかなくみえて、日の入は、海の中に入とそ、あやしめれる。
わさとならては、人など、くへくもなし、閑に哀なる、柄にてそ侍け
る。

21 前掲注1。

22 徳田和夫「『住吉物語』襍記——室町文芸の視点から——」（前掲注3）
に言及がある。

【附記】

本稿は、奈良絵本・絵巻国際会議京都大会（二〇〇四年八月）における口
頭発表に基づくものである。席上ご教示いただいた諸先生方に深謝申し上げ
ます。

【9月22日受付、10月15日受理】